

# 東成の歴史

シリーズ  
No.7

“昭和のひがしなり”（終戦まで）

大阪府文化財愛護推進委員  
東成区コミュニティスクール“歴史シリーズ”講師

友田 譲

大正14年に大阪市へ編入以来、昭和に入ってからはいろいろな面で都市化され、発展の一途をたどるのです。区勢の伸長に伴って区画整理が行なわれ、上下水道や公園など、各種公共機関が整備拡張される中で、まず区役所庁舎が発足当初の鶴橋町役場から、現在地に新築移転したのが昭和5年のことです。

昭和初期の東成区は、現在の生野・旭・城東・鶴見の四区をも含む広大な区域を有し、人口も35万を数える大区で、そのため区政は複雑繁忙を極めたので、昭和7年10月に当時の第1・第2出張所の区域を「旭区」として分区独立するに至りました。その後、区勢はますます発展し、昭和18年に再び「生野区」「城東区」が分区独立にすることとなり、当区は地理的にも大阪市編入当初から、中心的存在として1,200年来の歴史的な「東成」の名称を守り現在に及んでいます。

交通機関も、西の城東線（現環状線）と南の大軌電車（現近鉄）が唯一のものでしたが、昭和2年に市電が下味原から今里まで延長開通し、城東線も高架化・電化され、昭和8年

「森之宮」「鶴橋」両駅の開設にともない、玉造駅とともに区内交通は飛躍的に便利になりました。

しかし昭和9年9月21日、突然襲った室戸台風は、北中道・中道・神路・中本の各小学校校舎をなぎ倒し、教員・児童にいたましい犠牲者を出すという、すさまじい爪跡を残しました。これを機に学校校舎も漸次鉄筋コンクリート造りに生まれ変わり、区内工業もこの風水害後に画期的発展をとげました。

昭和14年頃ともなると、戦時体制が強化され、各校下ごとに町会・隣組が結成され、太平洋戦争の戦況が激しさを加えるにつれて、区民の生活も圧迫されてきました。昭和20年春頃から区内のあちこちが米軍の爆撃で罹災し、殊に6月15日の空襲では6,363戸の全焼家屋と、20,699人の罹災者を出すに至りました。

やがて8月15日の終戦を迎え、区民はあらゆる苦難から立ち上り、東成区復興に力強い鎚音を響かせ、営々として明るい町づくりに第一歩をふみ出したのです。

ご意見、ご希望は……市立東成会館 助東成区コミュニティ協会 TEL6972-0717 FAX6972-0838